

シヤアの反乱も過去の事となり、セイラが遊びに来て背徳な一日を過ごしたり、ジュードと再会して官能な日々を過ごしたりした事も懐かしく感じられる様になった頃の話である。

*

*

*

地球圏や各コロニーでは、相変わらず小規模な紛争は続いているものの、シヤアの反乱の様な大規模な紛争は今の所起きてなかった。表向きは平和な日々：しかし、その裏ではまだスペーススノイドとアー Snoイド、またはスペーススノイドの中でも連邦系と旧ジオン系の住民の間での小競り合いは依然として続いているのが現状であつた。

ある日の朝、ハマーン（注：アルテイシアという偽名で暮らしている）は学校に出かけるハリーを玄関先で見送り、世界情勢と株価の状況を一通り見た後、先月の旧ジオン互助会（表向きは会員制のクラブ）の決算報告書を眺めながら、少し遅い朝食を食べていた。

その仕事は、表だつては酒の席での相手をする事であるが、その他にも心のケアを行ったり、双方の合意さえあれば別室にて自由恋愛を結ぶ事も可能であつた。

勿論「ジオン互助会」という名前は公に公表する事は出来ないのです、表面上は「会員制クラブ」と名乗っていた。

この会は、大きく分けて二つの運営で成り立っていた。まずは協賛金や寄付金を募り、会員となつた

旧ジオン系（連邦系の人間でも差別はしないが、やはりこの会を頼ってくるのは、仕事に制限がある旧ジオン系の人間が大半だった）の人々への就職斡旋、そして資金援助を行う事と、酒場やラブホテルを運営して人間の根本的な性欲とストレスを解消させる事である。

特に後者の方は、裏の根回しもきっちり行っていたので、表だつては公表できないような地球連邦の高官達も、裏のサービスを求めて多額の金を落としており、それが結果的に旧ジオン系の人々を自立させる為の援助資金になっていた。

その互助会の月次資料を見ていた所、来月の脱退（独立）者リストの人数：それも女性が予想以上に多い事が判った。勿論、その互助会から脱退するのは自由であり、それに頼らずに自立した生活が確実に出来るという事なので、その会を立ち上げたハマーンとしても喜ぶべき事ではあるのだが、ホステスの減少は、一時的にせよ会の運営を滞らせる事になってしまうのが、ハマーンにとっては気がかりだった。金銭的な面で言えば、確かに一時期収入が減るとはいえ、それ程気にする必要も無いのであるが、心のケアを行う面では、出来るだけ迅速に対処してあげたいと彼女は思っていた。だが、その為にはある程度のニュータイプ能力を必要とする上に、ケアの方法もレクチャーしなければならず、今から人員を募集したとしても、旧ジオンに人間という人選と適正を見極める時間等を考えると、最低でも2週間程度の日数が必要だった。当然今までも同様の事はあったのだが、その時はハマーン自身が現場に入ることなどかその場を凌ぐ事が可能だった。酒の席で相手の心を癒やす上に、時には冷酷な女王様として、また別な時には堕ちたマゾ奴隷としてプレイ相手の欲求を満たし、また心が疲弊しきっている者には自らの体を提供して「仮初め」ではあるが恋人のように接し、彼女なりに旧ジオン国民の悩みと不安を取

り除いていた。

だが、今回はプレイを希望する人間が集中してしまった為、それに対処する人員を育成する時間が全くといって良い程取れなかった。これでは仮にハマーンがフルに対応してその場を凌いだとしても今後に不安が残ってしまう事を意味していた。更に間が悪い事に、今回の希望はM役で奉仕する人数…それもハードなプレイを希望する者が殆どだったのである。ハマーンはその資料を見ながら、こう呟いた。

「困ったわね…。Mのプレイは体に負担が掛かるし、排泄物だってそう簡単に出るモノでは無いから、休んでいる間に新人の指導をするとして、その間どうしても一人…それもハードなプレイが可能な人が居ないと…。出来ない事は無いけど…。私に何かあった場合…辛いわね…。」

席を立ち、コーヒーをカップに注ぐハマーン。そうした時を過ごしていたが、やがて意を決した様にある女性に電話をかけた。相手は、数回のコールの後にすぐ電話に出た。

「あ…アルティシア・マイネです。ご無沙汰してます。実は…私が参加している…ええ、あのクラブの件でその…お話がありました…少しお時間を頂ければ…え！？今日ですか！それは早い方が助かりますので…判りました。では午後にお待ちしています」

電話を切ると。ハマーンは少し安堵した様な、そしてそれと同じ位不安な表情をしていた。

『これでいいのよ…私が心の底から頼れる人は彼女しかいないんだから…』

そんな窓の外には、暖かい日差しが心地よく漂っていた。

*

*

*

午後、ハマーンの家に電話の相手が訪れた。セイラ・マスである。

「ハマーン。お久しぶり」

「お久しぶりです。セイラ義姉さん。今回は無理を言って来て貰って済みません」

「ううん。他ならぬ義妹である貴方があえて私を頼ってきたのですもの。きっと自分ではどうしようも無い事なんだろうと思ってね……」

「ええ……実は……」

ハマーンはそう言うと、ジオン互助会の現状をセイラに語り始めた。セイラも幾つかの質問を返したが、基本はハマーンが語るといふ時間がしばらくの間流れた。話が一通り終わった後でセイラがこう言った。

「なる程ね。確かに新しくクラブに入った女性に、酒の席での相手はともかくとして、ハードなプレイを強要させる訳にもいかないわね」

「ええ……ソフトSMならまだ大丈夫だと思うのですが、痛さや、屈辱、惨めさを快感に変換出来るスイッチが無い状態での相手はさせられないですから……」

「確かにそうね……。そういう事だったら私を呼んで正解だったと思うわ。確かに私は筋金入りのSだけど、同時にMの心も充分判ってるから、どちらもこなせるし、少なくとも相手を満足させる事は出来ると思うわ」

「助かります。お義姉さん」

「で、私はいつからヘルプで参加すればいいの？」

「早ければ早い程……」

「じゃあ早速今夜から参加するわ。期間は一〜二ヶ月もあればいいかしら」

「ええ、それだけあれば旧ジオン系のネットワークを使って人材を集められますし、一通りの技術と心構えを教えられるす」

「了解。ではこの話が終わったら、ちょっとオフィスに電話するわね。で、その間の宿は……互助会の建物の空き部屋か、この家で寝るとして……普段の服や下着とかは別として、プレイ用の下着とかコスチュームはどうする？自分で買ったのは家に置いてきてるけど……」

「サイズさえ言うてくれば、お義姉さんに似合う下着や服をこちらで用意します」

「助かるわ」

そう答えた次の瞬間、セイラは少し意地悪そうに言った。

「あとは……私が貴方の要望に応えられるか、貴方に直接判断して貰わなきゃね」

「え！？」

「まあ、久しぶりの再会なんだし、貴方と共に心と体の疲れを取りたいんだけど……嫌かしら？」

ハマーンは一瞬キョトンとした表情を浮かべたが、次の瞬間全てを理解した。

「は……はい。判りました。今お湯を入れますのでソファで待ってて下さい」

「頭の回転が良い義妹を持つと楽しいわ。最近ご無沙汰だったので、少し疼いてたのよね」

「お義姉さんは……相変わらずお元気そうですね」

「そうね。苦しい事や辛い事はなるべく考えない事にしてるの……私……。一度切りの人生だから……」
セイラがそう答えると、ハマーンは頬を赤らめながらバスタブにお湯を注ぎに行った。

*

*

*

しばらくした頃、脱衣所で服を脱ぐ二人の姿があった。ブラを外しながらセイラが言った。

「ハマーンって、子供を産んでも体型が変わらないのね」

「えっ？そんな事無いです。肌の艶も無くなってきましたし、もう限界です」

「私に比べればまだまだ大丈夫よ」

「お義姉さんこそ、いつまでも美しくて羨ましいです」

「そう言ってくれて嬉しいわ。じゃ、入りましょ」

「はい」

二人はそう言いながらバスルームへ入ると、まずお互いにシャワーで軽く汗を流し合った。そしてどちらからともなく唇を重ね合わせ肌を密着させた。やがてセイラの手がハマーンの胸を触ると、彼女はビクッと反応した。

「アンッ！」

「ふふっ、相変わらず感度が良いのね……じゃ……」

そう言いながらセイラは手を背中から腰へとまで回し、ハマーンの股間へと這わせた。そして全体を

何度もそつと回した後で、そつとクリトリスの皮を剥いて優しく円を描く様に愛撫するのだった。

「お義姉さん……んんっ！」

そう言いながらセイラにギュッと抱きつくハマーン。その行為を感じつつ、セイラはしばらくの間指をヴァギナの穴へと二本、三本と入れてこねくり回した。ハマーンの息が荒くなっているのが判る。

「ハマーン。貴方の股間……もうこんなになってるわよ」

セイラはそう言うと、ハマーンのヴァギナを触っていた指を彼女に見せた。若干粘り気のある体液が指に絡み付いているのが判る。

「じゃあ…味見……つと」

セイラはそう言うと、ハマーンの体液が付いた指を舐め始めるのだった。

「ん……ハマーン……貴方の味がするわ。とつても、とつても愛しい世界中でただ一人だけ、私だけの義妹の味が……」

「セイラ義姉さん……」

「私を頼ってくれた事……嬉しく思うわよ。ハマーン」

「は……い」

そう答えると、ハマーンは目を潤ませながらセイラの乳首を軽く舐めた後、再び濃厚なキスを始めた。そんなバスルームには二人の息遣いと、下に転がったシャワー音だけが響いた。

二人がそんな行為をして一時間位経っただろうか。崩れ落ちる様な絶頂はセイラが2回、ハマーンが

4回と少なかったが、軽い昇天を含めると二人とも二桁は軽く超す位のプレイを堪能していた。

そして体の火照りが収まると、どちらからともなくバスタブに浸かり、互いに腰を下ろして向かい合っているが、ハマーンがセイラの上に乗る様な感じで抱き付き合った。何度も口、首筋、胸にキスをし合う二人の姿があった。そうしていると、セイラが優しく囁いた。

「大丈夫？ ハマーン？」

「はい。これ位でしたら……。でもお義姉さんにしてみれば、こんなプレイでは物足りないのでは？」

「本音を言うとその通りね。縄で縛って動けない様にしてから全身に聖水を浴びせたり、浣腸してお尻を高く上げたまま放置して、自分の排泄物を体に浴びさせるとか……。考えただけでもゾクゾクするわ」

「元々無理を承知で頼んでいるのですから、お義姉さんがそうしたいというのでしたら……。私……」
頬を赤らめながらそう答えるハマーンを、セイラはギュッと抱きしめて言った。

「それは全てが終わってから楽しみに取っておくわ。今は私達に救いを求めてくる人達の心を少しでも癒やす事……。それが先決でしょ？」

「はい！」

そう答えるとハマーンはセイラに優しく抱き付いた。セイラの優しい波長がハマーンに伝わり、それがまたハマーンの中で増幅されてセイラに伝わりと、果てしない満ち足りた気持ち二人の中を交錯した。ニュータイプ同士が性行為をした際に生じる一種の共振である。この様な快楽を数時間楽しんだ後、二人は同じベッドで安らかな眠りに就くのだった。

*

*

*

その後二人は自分達の事よりもこの互助会を頼ってくる者達に精力的に対応した。昼は主に仕事の幹旋と社会教育をメインにし、夜は酒場での対応と、新しく会に入ってきた女性達への教育を行い、夜半になるとラブホテルでのプレイを介した心のケアを行った。時折、ハードなプレイが続くと、ハマーンもセイラも疲労困憊といった表情をするのだが、数時間の休みを挟み、一晩で3回転（二人で計6回転）の客を連日こなしたのだった。しばらくすると、新人女性の中から酒の席での対応以上の行爲を行って収入を得たいと思う者に対して、ハマーン自らが数週間の間、実際に体を合わせて適正を検査し、教育を行った。

男女の性行爲での一通りのテクニックは勿論の事、ニュータイプ能力を持っている者に関しては、その能力を充分に活用する技術を教えた。また更にSMという行爲、特にハードなMでの対応……更に言うならば大小便という物への抵抗感を少しずつ薄れさせ、一通りのハードな行爲にも慣れる程までに教育した。大小便に抵抗がある……嫌悪感や嘔吐する事に関しては、幼い頃からそれらは汚く穢れた物という刷り込みによる所が大きいので、まずは快楽の中で自分の体から出るモノだという事を徹底的に自覚させ、絶頂する寸前に触らせて慣れさせ、嫌悪感しか生じなかったものを徐々に快楽へと変化させていった。そして、一端心の箍が外れて慣れてしまえば、極端な話パブロフの犬と同じで排泄物の匂いを嗅いだけで興奮するような体になってしまいう上に、その様な行爲を何回も行いう事で、やがて更に上の

刺激を求めなくなり、自分をトコトン墮としてみたいという衝動に駆られてくる事を、ハマーンはシャアによって体験させられていた。

勿論、その課程でどうしてもそういう行為がどうしても出来ないという者に関しては、それ以上無理に強制はしなかったし、プレイを行う前には雑菌でのリスクが伴う為、必ず抗生物質の飲用を必須としていた。またプレイ相手側にも最低限のルールを課しており、それに度々違反した段階で、仲間が経営しているジオン系の最底辺職場での強制労働送りになる事が明記されている上に、性病や伝染病等を持っていない事を証明する医師の診断書を持参しなければならないという徹底ぶりだった。それというのも、ハマーンはこの互助会を商売では無くあくまでも旧ジオンの民の心を救おうという考えで運営しているからだ。その為、常々彼女が新人の女性に言っている事は、これは仕事と割り切って行うモノでは無く、あくまでも男女（女性同士の時もあるが）の恋愛行為としてその時は真剣に應對する様にという事を徹底して言い聞かせていたのである。その様な甲斐もあり、予定よりも若干長引いたが、三ヶ月目にはセイラは勿論の事、ハマーンも急場のヘルプ時にしか夜の仕事をを行わなくても良い程になった。

やがて昼の仕事も一段落付き、セイラが職場を去る時がやってきた。事務所内にいる男女から沢山の花束を貰い、嬉しそうに談笑するセイラ。実際、彼女は昼の仕事も、夜の仕事もハマーンに劣らない位精力的に働き、そして一緒に働く者達に自分の持てる全てを教え込んだのだった。それは、やはり彼女も旧ジオン系の人間という事を多少意識したのかもしれないし、または単なる気まぐれだったのかもしれない。

れない。だがハマーンをも含めてこの互助会内で、彼女が去ってしまうのを惜しむ声が多くあり、残留を望む嘆願書も数多く寄せられた。ハマーン自身、セイラが互助会内に残ってくれた方が、今後の運営もかなり順風になるのは判っていたのだが、セイラが運営している組織の事もある程度は知っていたので、無理に引き留める事は出来なかった。だが、気が向いた時に訪問して欲しいという約束だけはどうか取り付けた。

もつとも、その代償が「ハマーンをセイラが二週間好きに出来る」という約束の下で決められた事を、二人以外の者が知る由も無いのだが……。

*

*

*

その夜、互助会が運営するラブホテルの一室で、セイラとハマーンはベッドの上で裸になってお互いの体をまさぐり合っていた。その最中にハマーンが頬を赤らめながら言った。

「お義姉さん。今回来てくれて本当に助かりました。お義姉さんがいなかったらと思うと……」

その言葉に、ハマーン的首筋を優しく舐めながらセイラが応えた。

「そうだったかしら？ 案外私が居なくても大丈夫だったんじゃないくて？」

「あんっ！それは……お義姉さんが居てたからこそ……あっ……上手く出来た事で、私一人だったら現場が大混乱したと……はぁ……思います……もの」

心の内側から溢れ出る快感を必死に押さえながら答えるハマーン。そんな彼女にセイラは右手で胸を、

左手でクリトリスを優しく触りながら話しかけた。

「昼の出資者との交渉や就職の相談などを見たけど、さすが元ネオ・ジオンを率いていた人間だと思つたわ。相手への交渉、そして説得もうそうだけど、仲間へのアドバイスが的確だったし、皆があなたを信頼してるのが良く判ったわ」

「くっ……ああっ……嬉しい……です。私もネオ・ジオンで人々の統率に……んっ……はぁ……一度失敗してますから……もう二度と……人を悲しませる事は……しないと言いました……ああっ！！」
軽くハマーンが絶頂を迎えた。目をつむり、呼吸を荒くしているハマーン。

「……ジュードーとの戦いの後、兄に助けだされてベッドの上で目覚めた時、貴方……泣いたそうね」

「……はい」

「負けたのが悔しかった？」

「いえ、そんな事は……あ……でも……やっぱり悔しかったのかな……」

「素直ね……貴方は……」

「そう言えばお義姉さんは、グリプス戦後にシャアがアクシズに滞在していたという事は知っていましたか？」

「初耳だわ。兄はあの戦いの後、表舞台から消えて新しい組織作りに奔走してたものとばかり思ってたわ」

「私の部下が破壊された艦船内に生存者がいないか探していた際、一般市民と偽って難民申請しようとしたのですが、たまたまシャアの顔を知っていた者がその場にいたので……」

そう答えながら、ハマーンはセイラの下半身へと移動し、優しく足を開かせて右手でクリトリスの皮を剥くと下で舐め始めた。セイラの顔が徐々に赤く染まってきた。それを必死に隠しながら話すセイラ。「でも兄は旧ジオン軍の軍籍から抜けてなかった筈だし、……んっ……結果的にアクシズを裏切って情報流した上に敵対した訳なのだから……」

ハマーンの舌が一瞬止まった。

「それを言われると……辛いですね……。グリップス戦の最中は、何度も戻って来さえすれば全ての事を不問にするつもりでしたし、アクシズで保護した際も、厳格な処分を望む部下達を押さえ込んで除隊扱いにした事が、結果的には反乱分子に勢いを付けさせてしまう原因になりましたし……」

「兄も軍人なんだから、組織を裏切った者がどういう結末を辿るかは判っていたでしょうに。軽くて禁固刑……でも兄の立場だと銃殺でも良かったのではなくて？」

「はい。彼を保護した際、実際にはそれを望む声も……少なくともありませんでした……。でも、いくら指導者であっても、私には彼を殺す事は……出来ないのです。なぜなら……私は……私は……」

そこまで言った時、セイラが起き上がり、ハマーンと対峙する様な姿で座りながら言った。

「兄と……ご主人様と雌奴隷という主従関係を結んでいたから……かしら？」

その言葉に、目線を背けながらコクリと頷くハマーン。

「じゃあ、戦場でシヤアと戦った時は？」

「彼を説得しながら、絶対に致命傷を与えない様にと戦ってました。たぶんシヤアも私が絶対に殺せないという事は判ってた筈です」

セイラは少し笑ってからこう答えた。

「……でしょうね。その位の事は平気でする人だから……たぶんアクシズで貴方を調教していた時からそういう事態を考えてたと思うわよ。で、彼を保護した後には説得とかはしなかったの？」

「それは……当然何度も行いましたし、実務は全て私が取り仕切るの、私の相談役としていいからそばにいて欲しいとも言ったのですが……残念ながら袂を分かつ結果になってしまいました。戦場ならまだしも組織に属さず初めから出直すとまで言われたので、私には止める事は出来ませんでした」

「辛い……選択だったでしょう？」

「はい。アクシズは彼……シヤア・アズナブルがいてこそ機能する組織でした。彼と私が共に手を取り合うからこそ、反乱分子も納得して協力しましたし、地球圏での支援も得られた事でしょう。それに私がネオ・ジオンを名乗って地球圏へ侵攻したのは、回り出した歯車を止められなかった結果であって、サイド3を奪還した後は、どこまで負けるのを引き延ばせるのか……だけの戦いでした。それが判っていたからこそ、シヤアがアクシズを去る時にミネバ様をシヤアに預けたのですが……」

「ふふっ。あの戦力でダカールを制圧して、戦線が拡大した時点で判る事よね。だからこそコロニーを落としたのでしょう？」

「お義姉さんは何でもお判りなんですネ」

「そんな事無いわ。ネオ・ジオンという組織の中で、精一杯虚勢を張って奮闘している貴方に、同じ女として興味があっただけよ」

実際、セイラはシヤアがアクシズへ逃げた事も、そこでハマーンと深い関係を持っていた事も、戦争

が終わり、シヤアが再び台頭してきた時に再会した際に初めて知ったのである。

「でも私、指導者だった頃は冷酷で怖い女とか散々な言われ方をされてましたけど……」

「それは立场上そうするのが当然だし、もし私が貴方の立場だったら同じ事をしたと思うわ。もちろん貴方と違って喜んでだけどね」

「義姉さん……」

「それはともかくとして、兄は元々あのルックスの上に、もっともらしい口調で人を魅了する才能があるし、一見面倒見が良さそうに見えるので兄を慕って付いてくる人もとても多いのだけど……」

「……？」

ハマーンは不思議そうに見つめると、セイラ気まずい表情で言った。

「たぶん貴方も経験した筈だけど……兄は自分の信念の為なら親友でも組織でも、それまで信頼関係を保って築き上げてきたものを平気で捨てるのよね……。何とかそれが自分の考えと合わなくなったり、情熱が冷めると逃げたり背信行為を躊躇いなく行う……それもある日突然に……。ね。でもよくよく考えてみると、父も似た様な性格だったらしいのよね」

セイラが呆れた様な表情をしながら話を続けた。

「父の表の顔……指導者という顔ね……を維持させる為にデギン公やあなたのお父様にはかなり迷惑をかけたという事を元側近の人から聞いた事があるわ。ハマーンはそういう事聞いた事は無いかしら？」

「ええ……そうだったと、お父様からは聞いてますが……」

ハマーンは言いにくそうに答えた。

「ふふ。気を遣わなくていいわよ。たぶん……本当の事だから……」

寂しそうに呟くセイラ。そしてその後更に続けて言った。

「そう言えば、いつ頃だったかしら、兄がネオ・ジオンの組織固めを行っていた時に数回会った事があるのだけど、その時いつも傍らに同じ女性を同行させていたわ。名前は……何だったかしら……」

「たぶん……ナナイ・ミゲルだと思います。元私の部下で、ネオ・ジオンが崩壊する前にシアアの元へと送り込みました」

「そうだったの……。成る程ね……」

「どうしたのですか？」

不思議に思うハマーンを、セイラはそつとベッドに押し倒して、軽くキスをしながら囁いた。

「貴方……本当は自分がナナイという女性の代わりにシアアの側にいたかったんでしょ？」

「え……私は……単にシアアの力になればいいと……」

「この私の前で建前を言わないの。じゃ、私の前で本音で最初からもう一度話さない？よくて？」

下半身をセイラにまさぐられながら、ハマーンは真つ赤な顔をしながら言った。

「はい……判りました。本当でしたら私が……アクシズをネオ・ジオンと称して地球へ降下する時、シアアがその先頭に立って指揮を執り、私はその傍らで実務を補佐する……という予定でした。でも、現実的にはシアアはもう一度自分で組織を作ると言って去って行きましたし、一度回った歯車を止める事は私でも出来ませんでした。そして……ダカールへと降下し、連邦と交渉してサイド3を奪還するという悲願を達成しました。そして、その後に各コロニーの実力者達と非公式に会談を設け、皆共同して連

邦に対抗しようと画策したのですが、やはりシヤア……ダイクン家のいない組織には協力出来ないという事で……内部でも組織が固まってませんでしたし、戦力的な面でも負けるのは時間の問題でした」

「なら、組織ごとシヤアに協力を頼めば良かったのではなくて？本物のミネバも兄に預けてたのでしょ？」

「……確かにそれも選択肢としてはあったのですが……。アクシズで保護した時にお互い納得して別れた訳ですから、彼の活動に支障が出る事はしたくはありませんでした。その為ナナイに組織の資料と資金源、それとシヤアの性癖や好み、私が仕込まれた性技の全てを教え込んで彼の元へ送り出しました。でも……本当でしたら私がシヤアの側で死ぬまで尽くしたかったです。彼と愛し合いながら一緒に夢を見たかった……」

ハマーンがそう言い終わると、セイラは彼女を優しく抱きしめた。

「やっと本音が出たわね。ふふっ。あんな人間として最低な兄をそこまで慕ってくれるなんて……妹として本当に嬉しいわ。でも前も言ったと思うけど、もう兄の影に縛られなくてもいいのよ。貴方は貴方の人生をハリーと共に歩みなさいな。私もその為の協力なら惜しまないから……」

「はい……」

ハマーンの目に嬉し涙が溢れてきた。

「どうしたの？ハマーン」

「いえ……今……こんなに幸せでいいのかなと……志半ばで無くなった者達に申し訳ないと……」

「ふふっ。でも貴方がこのコロニーで創設した互助会も、基本的な考え方はネオ・ジオンの頃と同じな

んでしょう？」

「はい。今の私がここで出来る事をやろうと思つて……」

「それで充分よ。今の貴方は素敵な表情して活き活きと活動してるわよ……」

「そう言ってくれると……あつ」

「じゃ、これから快樂の果てまで連れてつてあげるわ」

「……は……い……ああつ！」

「ふふつ。可愛いわね……ハマーン」

セイラがそつとハマーンの左の乳首を舐め甘噛みした。そして彼女の性行為は、ハマーンが何十回目かの絶頂を迎え、肩で息をしながら動けなくなるまで続いた。

*

*

*

翌日から、セイラのハマーンに対する本格的なプレイが始まった。セイラは幼い頃兄にとってもハードな調教を受けた（もつとも本人達はそれを異常な性行為とは思ってなかったが）経験があり、セックスやSM行為に対する抵抗感や罪悪感はなくと言つて良い程無く、むしろそれらを行う事によつて得られる快樂を十分すぎる程楽しんでいた。またハマーンもアステロイドベルトにいた頃、やはりシヤアに性欲の捌け口として徹底的に調教されて主人と雌奴隷という永遠の誓いを立てた仲である。ただ、シヤアが縛りや野外露出等の羞恥プレイが好きだった事もあり、アヌスに関してはアナルセックスをする位の

レベルでしか開発されてなかった。その事をセイラは以前ハマーンの元へ遊びに来て肌を重ねた際に聞いており、もしも一度会う事があれば彼女のアナルを性的に開発してみたいと密かに思っていたのだが、まさか彼女の方からコンタクト（用件はハマーン自身の事では無かったが）を取ってくるとは思わなかったので、連絡が来た時は一件平静さを装ってはいたが、内心愛しい人に会える嬉しさと同じ位心がときめいていた。

話は少し前に戻るが、セイラがハマーンの元へ応援に来たその日から、ハマーンは排泄する時以外は、なるべくアナルプラグを装着する様にとセイラに命令されていた。ハマーンもその事に関して一瞬だけ驚いた様子を見せたのだが、直ぐにシャアの奴隷時の態度になり、セイラが持参したサイズが違う数種類のアナルストッパーを受け取った。その後、風呂に入って際に充分アヌスを解した後、ワセリンとローションを塗って一番小さいサイズのストッパーをアヌスにゆっくりと入れるのだった。近年後ろの穴は余り使ってなかったので少し痛く違和感があったが、しばらくすると慣れてきて台座の部分も余り厚く無く、ヒップのカーブに合わせて反っている為、日常生活で不便を感じる事は殆ど無かった。ただ長時間入れたままだと、どうしても痛くなってしまうので、適度な所で外して軟膏を塗り、多少良くなった所でまた入れるという事を繰り返し、入浴の時に良く解してピストン動作を行い、慣れてきたら次の大きいサイズへと変更していった。また、夜の仕事のヘルプでSMプレイがあつた場合、S役の時はそのまま皮やエナメルの下着を身に付けて行い、M役の時は事前に外して対応していた。ただし、どうしてもハマーン（アルテイシア）でなければだめという相手以外は、全てセイラが彼女の代わりに引き受けてくれていた。勿論、体に負担がかかる行為を行っている為、控え室に戻ると肩で息をしながらその

場で横になる程の疲労状態なのだが、部屋の外へ出ると全くそんな素振りは見せずに応対していた。

話をセイラとハマーンのプレイ時に戻すが、最初の数日はセイラに対してハマーンが徹底的に奉仕するという感じだった。ハマーンはアナルプラグを装着したままの状態であり、全身に縄掛けされた姿か、黒の網タイツと生地が少ないTバックの透けた黒下着の姿でセイラの全身を舐め回し、性感帯を愛撫し、時にはデイルドやバイブ等で何度も彼女を絶頂に導いた。そして最後はハマーンがセイラに濃いグリセリン濃度の浣腸をされて、脱げにくい三段式のバルーンプラグで栓をされて、三十分排泄の衝動に悶え苦しみながら耐えるという事が行われた。当然ながらセイラはハマーンをそのまま放置する訳が無く、乳首のピアスを引っ張ったり、クリトリスに電気を流したり、ヴァギナの中に巨大なバイブを入れて排泄の苦しみと快楽の絶頂を同時に与えていた。またセイラは尿意を催した際は、ハマーンに浴びせたり、直接尿道口に彼女の口を付けさせて全て飲ませたりした。そして最後はハマーンの体から排泄物を噴射して終わるのだが、セイラは彼女に固形物は全て自分の手で処理するように命令した。その命令に、当初は若干躊躇しながら排泄物を手で触っていたハマーンだったが、自分の体から生み出した排泄物でもある事、そして何より過去にシヤアから同じ様な調教を徹底的に受けていた事もあり、数日を経たずして抵抗無く触る事が出来るようになった。そして、それに比例するかの如く、セイラの責めも更にエスカレートしていき、プレイ時間の中で徐々にハマーンが快楽の中に堕ちている割合も増えていった。

セイラはプレイの最中、二桁の絶頂を迎えるとこれまでとは逆に、ハマーンに対して徹底的な快楽責めを行った。クリトリスとヴァギナを舐め、愛撫して絶頂の寸前で止めるという行為を一時間以上繰り返

返していた。もちろんその間、彼女はハマーンに対して卑猥な言葉を浴びせかけ、羞恥心と快楽の沼へと墮としていった。そして、彼女が絶頂を迎えたくてセイラに懇願し始めた時、アヌスに浣腸液を注ぎ込まれ、ワセリンを大量に塗ったストッパーで栓をして、そのまま頭を下にして尻を上にするという「まんぐり返し」の状態にさせられた。もちろんそのままでは倒れてしまうので、セイラがアナル栓をいじりながら体を密着させて支えていた。そして空いた手でハマーンの乳首をこねくり回しながら…。浣腸による苦痛と、快楽が交差して意識が混濁しているハマーンに向かって、セイラが意地悪な口調で言い放った。

「ハマーン。今どんな気持ちなのかしら？正直に答えてみて。どう？気持ち良くて？」

苦痛に顔を歪ませながらも、ハマーンはこう答えた。

「はい……。お腹の中が熱くて気を抜いたら出そうなのですが、そのもどかしさがとっても気持ち良いです。ああっ……」

腸が収縮し、アナルストッパーの隙間から若干の茶色い液体が出てしまった。必死に体内へストッパーを押し込むハマーン。

「んっ……ぐぐっ！！！」

排泄の波が収まり、一瞬ホツとしたハマーンに対して、セイラが言い放った。

「そんなに押すと、お尻の中にストッパーが入っちゃうわよ。貴方のこの部分、もう随分はぐれてきているから……。どの位のストッパーまで入るようになったの？」

「ふ……普段は6センチのストッパーを入れて生活していました。でも風呂でマッサージをすれば8セ

ンチ位までなら何とか……」

「そう……随分拡張したのね。兄は貴方の後ろの穴には興味なかったのかしら？」

「浣腸して悶え苦しむ私を見るのは好きでしたが、ストッパーを入れたとしても5センチ位まで、後はアナルセックスをする位でした」

「そう。拡張には興味を示さなかったという訳ね」

「はい。でも後ろの穴だけでも何度となく昇天しましたので、感じない訳では無いのですが……あ
あっ！」

そう言った直後に強烈な便意がハマーンを襲った。彼女は大きく口を開けながらも、排泄衝動により小刻みに体を震わせながらも必死にアナルストッパーを押さえ……と言うよりは中に押し込むようにしながら、必死に中身が吹き出すのを防いでいた。

「あっ！ああっ！！ぐっ！ああああっ！」

それを嬉しそうな表情で眺めているセイラ。

「苦しい？それとも気持ち良い？」

「く…苦しいです。早く体から全てを出したいです」

目を潤ませながら答えるハマーン。

「そうかしら？貴方、苦痛が引いた瞬間恍惚な表情してたわよ」

「そ…それは…痛みが引いたからでは…」

「そうね。そして貴方のその瞬間の表情が何とも言えないのよねえ……」

「そんなに……気持ち良さそうな顔をしてるのですか？……私？」

「ええ、この世で最高の幸せを得たような表情をしてるわ」

その瞬間、ハマーンは恥ずかしさで顔を赤らめた。

「どうしたの？ハマーン？そんなに恥ずかしがる事は無くてよ。快感に浸れるのは、人として生まれたからには当然の権利なのだから……。それなら廃人にならない程度に楽しまなくては損でしょ？」

「は……はい。その通りです。私もご主人様からそう言われながらずっと調教されていました」

「兄が？……そう。……やはり私も兄も似たもの同士と言う事ね」

嬉しいような、困惑したような表情を浮かべるセイラ。やがて、ハマーンのアヌスに埋没しているアナリストッパを弄りながら少し意地悪な表情を浮かべながら言った。

「さて、そろそろ限界なんじゃ無いの？どう？」

「は……はい。もう……全てを吐き出しそうな位辛い……です」

「そう。兄もこういうお尻を上にした格好で排泄させる事ってやってた？」

「はい。極たまに……ですが……」

「へえ……どんな感じでプレイしていたのか興味あるわね。ふふっ」

「シヤア……いえ……私のご主人様は、私を全身縄掛けして身動きが取れない状態にしてから……この様な仰向けでお尻を高く上げるような姿で浣腸されて……アナルストッパで栓をされたまま放置されました」

「放置？一緒にプレイとかでは無くて？」

「はい。排泄感で苦しんで、我慢の限界を迎えてストッパーを吹き飛ばしながら全身に汚物を浴びている私の姿を見るのが好きなんだそうです。惨めな状態で開放感に浸りながら、涙とヨダレを流している私に、何度ミルクを放出されたか……」

「ふくん。それで貴方はどうだったの？屈辱だった？それとも惨めだった？」

「はい……。でも私はそうされる事が好きな体に調教されましたし、愛する人が私のそんな姿を望んでいるのでしたら……」

「ハマーン。貴方は本当に兄の事を好き……いえ、愛しているのね」

「どんな事があっても、いえ、どんな事をされたとしても、心の中ではあの日主従関係を誓い合った事は死ぬまで……例え死んだとしても有効です……」

そう答えると、ハマーンは今日何度目かの排泄衝動を迎え、そして苦痛の波が引くと再びとても安らいだ表情をした。そんな光景を見ていたセイラだったが、ハマーンにアナルストッパーを押さえるように命令すると、右手にワセリンとローションをたっぷりと塗ってからこう言った。

「ハマーン。貴方の押さえてる物って何かしら？」

「ア：アナルストッパー……です」

「そう。あなたのお尻から出そうな汚い排泄物を止めている物よね。そうでしょ？」

「はい……その通り……です」

視線を反らしながら答えるハマーン。

「じゃあ、今入っているアナルストッパーはどんな形をしたのか覚えてる？普通は卵形の様になって、

肛門に近づくにつれて細くなつて脱けにくくなるんだけど……今回はどんな形だった？」

「確か……タケノコのような感じで段階的に太くなつていたと……思います」

「その通り。このアナルストッパーは手とかで押さえてないと直ぐ飛び出してしまう形をしてしてるわね。だからアナルストッパーと言うよりは、アナル拡張の道具と言った方が正しいのかしらね。ふふっ」

Sの血が疼くのか、とても嬉しそうな表情で話すセイラ。彼女は更に話を続けた。

「でね。ハマーン。私と体を重ねて数日経つんだけど、ほぼ毎日浣腸してたから、貴方のお腹の中に固い宿便は無い筈よね」

「は……はい」

「そして今回は少し濃度を濃くした浣腸液百CCとワセリンとローションをたっぷり塗った段階的に太くなる構造のアナルストッパー……太さは……確か肛門の所で直径7センチ位だったかしら……それを食わえ込んで排泄の苦痛を何度も堪えて……今貴方の体はどうなつてると思う？」

返答に躊躇しているハマーンに、セイラは彼女にアナルストッパーを押さえるところ言い放った。

「お腹の中の排泄物は良い感じにペースト状になつてるだろうし、貴方の肛門括約筋なんて、排泄したくてこんなにユルユルになつてるわよ」

アナルストッパーをゆつくりと押し込むセイラ。

「ア……ウググ……！」

そうすると直径7センチもあるアナルストッパーが、ハマーンのアヌスの中に入りそうになった。そしてセイラが押す力を緩めると、ハマーンのアヌスは猛烈な力でそれを体外に排出しようとした。それを

嬉しそうな表情でなんども繰り返すセイラ。

「ほくら。こうすると……貴方の中に全部入っちゃいそうね。全部入れちゃおうか？どうする？ハマーン？脱けなくなっちゃうかもよ？」

「あ……それだけは……」

「嘘よ。でも、こうやって自分の中にアナリストツパーが出入りしている姿を見てるのってどんな感じかしら？」

「とつても……恥ずかしいです」

「苦しい？」

「はい」

「今すぐ全部出して楽になりたい？」

「はい」

「こんな格好で排泄すると……自分の排泄物を全身に浴びる事になるんだけど……それでも排泄したいの？」

「はい。この苦しみから解放されるのでしたら、どんな事になっても構いません。早く……アナリストツパーを……」

そう言い終わるか終わらないかの時、アナリストツパーとアヌスの間から、茶色い液体が出てきた。排泄物特有の匂いもするその液体は、お尻を高く上げているハマーンのアヌスから腹部の方へ流れていった。それを見たセイラはこう言うのだった。

「あら……かなり限界のようね……。判ったわ。排泄を許可するわね」

「あ……ありがとうございます」

やっとこの苦しみから解放されるという期待に、安堵の表情を浮かべるハマーン。そんな彼女にセイラは意味深な言葉を投げかけた。

「その代わり、アナルストッパーを抜く時は排泄物を出さないように我慢してね？いい？」

「はい」

「じゃあ、抜くわね」

そう言うと、セイラはアナルストッパーに塗っていたワセリンを直腸内に塗り込む感じで捻りながらゆっくりと抜いた。体内から異物を取り除かれて、安堵の表情を浮かべているハマーンとは対照的に、セイラは小悪魔的は笑顔を浮かべながら、先程ローションとワセリンをたっぷり塗った右手をハマーンのアヌスに添え、指を一本、二本と入れていった。その行動に驚きの声をあげるハマーン。

「あ……排泄させて貰えるのでは……」

「ええ、そうよ。もうすぐ排泄させてあげるわ。ただし、私の手が貴方の中に入ったらね」

「え……そんな事……入らな……ぐっ！」

「そうかしら？ここの所ずっとアナル拡張してて、更に排泄感が高まって肛門括約筋が緩み切っている今なら……」

指が三本、四本、五本とハマーンのアヌスに入って行った。その間も時々茶色い液体が噴出したり、肛門が収縮したりしたが、セイラはそれを気にせずに手を上手く捻りながら、手の一番太い部分を少し

力を入れながら押し込んだ。悲鳴とも叫び声ともとれるハマーンの絶叫が響き渡った。するとセイラの手はワセリンとローションを塗っていた効果もあつてか、割とすんなりハマーンの中へ埋没した。

「ほら、入ったわよハマーン。見えてる？」

「はい。手が……私の中に入ってるのが……本当に入ってたんだ……」

「そうよ。貴方は今、フィストファックの状態にいるのよ。それもアナルフィストという普通の人ならやらない様な事をやってるのよ。ホント、ハマーンは変態のマゾ女よね。最低な女だわ」

「変態……セイラ様の手をお尻の穴の中に入れて喜んで……私は……変態……ああつ」

余りの異常な状況に、軽く絶頂を迎えるハマーン。そんな彼女にセイラはこう言った。

「ハマーン。私の手に柔らかい物が当たってるわ。今から排泄を許可するから、思いっきり出しなさい」

「はい……。ありがとうございます」

そう答えるハマーンに、セイラは彼女の中に入っている手をゆっくりと前後にピストンさせたり、中で開いたりした。すると、ハマーンは再び猛烈な排泄感を覚え、セイラに叫び声ともとれるような感じで言い放った。

「あつ！出る……ああつ！出ます！お願いですから手を……抜いて下さい！！」

その懇願に、セイラはニヤツと笑いながらこう答えた。

「何言ってるの？貴方はこのまま排泄するのよ」

「ええっ？そんな！このままだとセイラ様の手が私の汚い物で汚れてしまいます！どうか……手を抜いて下さい！でないと私……！！！！」

「いいから。思いつき出しなさい！」

セイラの手はまるで男性のペニスがピストン運動をするかの様に速い動きで前後に動いた。彼女の手はグリセリンで刺激された直腸と大腸を更に刺激し、猛烈な排泄感をハマーンに与えるのだった。

「!!!!!!」

猛烈な便意と、痙攣に、更にニュータイプ同士の快感の相乗効果も合わさって、猛烈な絶頂感がハマーンを駆け抜けた。余りの強烈な刺激に、口をポカンと開けていて何か声を出しても良い筈なのに嗚咽すら出ない……いや出せない位感じていた。そして自然と腹に力が入った結果、セイラの手と肛門の間から、粘土状の排泄物がニュルニュルと吹き出した。それらは、剃毛しているハマーンの下半身を通り、腹や胸へと垂れ落ちていった。それを見てセイラはこう言い放った。

「やっと出てきたわ。貴方の中にあつたとっても臭くて汚い排泄物がね。さあ、もっと出しなさい！そしてイヤらしい声で喘ぎまくるのよ！いいわね！」

「はい！はあ……セイラ様！ハマーンはこれから思いつき恥ずかしい声で喘ぎまくります！」

「素直なのね……ハマーン。それじゃあ、私の指に触れている排泄物……押し戻しちやおうかなあ……。それとも握ってみたり、搔き出してみたりしようかしら……ふふっ」

とつても嬉しそうにな表情で微笑むセイラに、ハマーンは顔を真っ赤にしながら答えた。

「……恥ずかしい……。とつても恥ずかしいです。でも、こんな姿を晒しながらも、私の体は私の意思とは別に食欲に快楽を求めてしまう。……。もっと……。もっと私を最低な女……。雌奴隷に墮として下さい。お礼に私の最高に淫乱で変態で快楽によりがり狂う姿を披露します。どうか、お義姉様の気が済むま

でこの私を責めて下さいませ……。ぐつつつつ！あぁっ……………」

余りの快楽に、後半は声にならない声を発していたハマーン。セイラはその姿を愛しそうに見つめた後こう言うのだった。

「ハマーン……貴方のそういう所が大好きよ。今から貴方が経験した事が無い快楽へ導いてあげるわ。もし固い排泄物があつたら、私の指で柔らかくしてあげるから、思いつきり快楽の中でよがりなさい！良くて？！」

「はっ……はい。お義姉様……！ぐぁっ！！うつ！！うおおっ！！！！！！壊れるうううう！！！」

更に手のピストン運動を強めるセイラ。それと連動してハマーンの肛門からはセイラの手との間から吹き出した排泄物が、彼女が力むたびに排泄された。またローションやワセリンが直腸内でかき混ぜられるヌチャヌチャした音と、手をピストンする際に入る空気音が入り交じり、とても淫靡な音を奏でていた。またセイラは腸壁や膀胱、子宮にとどまらず、大腸の更に奥にあるS字結腸までも徐々に刺激していった。その結果、ハマーンは数秒置きに絶頂と共に痙攣と排泄行為を何度も繰り返した。

「イクウウウウ！あっ！出る！あああぁっ！またイツちゃう！イクイク！あぁっ！お尻に手を入れられて排泄物を吹き出してイツちゃうの！あぁっ！またイクイクイクウウウウ！」

どの位この行為が繰り返されたであろうか。快感の影響で失禁しまくり、更に排泄物をほぼ出し切ったハマーンの体や周りには、それらが広がり大変な惨状となっていた。しかし、それでもセイラは行為を止めなかった為、ハマーンはもう叫ぶ声すら出なくなり目と口から体液を流してゼエゼエ息をしながら時折襲い来る絶頂感に体を痙攣させる状態になっていた。そんな行為をくりかえしながらも、セイラは

時折溢れて下に落ちた排泄物を左手ですくうと、ハマーンの体に塗り付けたっていた。そしてセイラ自身にも疲れが見え始めた頃、ハマーンの胸の谷間に溜まっていた排泄物を手ですくい、彼女に口元へ差し出した。

「はい。貴方が生み出した排泄物よ。ワセリンとローションとグリセリンが混じって良い感じに練られてるから、しっかりと味わって食べなさい。いいわね？」

「あ……」

目の焦点が定まらないまま、朦朧としながらも排泄物を口にして咀嚼するハマーン。

「どう？美味しい？」

「苦い……です」

「そうね。美味しかったら、みんな自分の排泄物を食べちゃうものね。しかしハマーン、貴方今、どんな姿をしてるか判る？人として最低な行為をしてるのよ。この変態！」

そう言い放つと、再び捻りを加えた激しいピストン運動を繰り返すセイラ。

「ああっ！イクツ！！グウウウ！！！！グハッ！んんっ！ああっ！ぐうっ！！」

羞恥と苦痛と快樂が入り交じり、叫び声にもならないような声で喘ぐハマーン。

「さあ！快樂の果てまで堕ちていきなさい！ハマーン！」

セイラの言葉に対して、ハマーンはもう答える思考を持ち合わせていなかった。今の彼女は、もう絶頂と排泄を繰り返すだけの生き物としか言い様がない状態だった。その後ハマーンはセイラによってたっぷりアヌスを責められまくった結果、数え切れない程の絶頂感と排泄感を味わいながら、最後には『も

う、お許し下さい』と懇願し、一分以上の連続絶頂を迎え遂に失神してしまった。

*

*

*

どの位経った時だろう、ハマーンは湯船の中で目が覚めた。人肌を感じる……と思った時、彼女を抱きかかえていたセイラが話しかけた。

「目が覚めた？ ハマーン」

「お義姉さん。私……？」

「少しやり過ぎたようね。長く絶頂した後に泡を吹いて失神したのよ。貴方」

「は……はい」

そう答えたハマーンに、セイラは濃厚なキスをした。軽く胸を揉まれて、クリトリスを触られたハマーンは、軽く絶頂感を迎えた。

「ううっ！ はあはあ……」

「イッたの？」

コクリと頷くハマーン。

「感じやすいのね。貴方は」

「シヤアにもそう言われてました。『だから貴様は責めがいがあ』……と」

「そうね。貴方って見た目との落差が激しいものね。私もそう思うわ」

その言葉に、頬を赤く染めるハマーン。そんな彼女にセイラが言った。

「そうそう。貴方が失神してる間、貴方の体に塗ったりその辺にまき散らした排泄物は私が片付けとい
たから。感謝してね」

「あ……」

ハマーンは我に返って自分を見ると、確かに塗られた排泄物や、風呂場にまき散らした筈の排泄物が全くなく、かすかに漂う匂いとそのプレイを感じさせる程度だった。ハマーンは申し訳なさそうに言った。

「その……お義姉さんにそんな事させてしまつて……本当ならその片付けも含めてのプレイだった筈なのに……本当にすみません。私の体を弄ぶ事で償えるのでしたら……精一杯尽くしますので……どうかお許し下さい」

その言葉に、セイラはハマーンの髪をやさしく撫でてこう言うのだった。

「本当ならそうするのがSとしてのMへの躰なんだけど……。でもね、貴方の体を綺麗に洗って、貴方の排泄物を片付けていた時にね、これは貴方の体から出てきたモノだと思つたらなんだか愛しくなつてきて……汚いとは思わなかつたわよ。ホントに」

「……そう言つて頂けると……気が楽になります」

「ふふ。貴方って本当に可愛いわね。そうそう、初めてのアナルフィストはどうだったの？」

「どう……というか、排泄感を伴ったアナルフィストがあんなに気持ち良いものだとは……思いませんでした。アナルセックスでしたらシャアと何度もしたのですが、あの快樂とは全く別物です……」

「ふふっ。正直ね。実はこのアナルフィストもアムロと関係を持っていた頃に際限なくやり合って、直腸内の感じるツボとか、ここまでなら大丈夫というのを彼と共に体で理解したのよ。だから手は激しく動かしてたけど、常に貴方の状況を把握しながらプレイしてたわ」

「それは……されていて何となく判りました。お義姉さんは、Sの人ですがM役も出来る人だし……」

「それは貴方もそうでしょ？ハマーン」

「私の場合は基本がMでS役も出来るというだけです……」

「お互いどちらでやっても気持ち良い訳だけど、しいて言えばというレベルの違いなので同じ様なモノよ。それにこういうプレイは如何に相手の限界を見極めて、それを超えない範囲で出来るかなのよね。だからSとMの両方を知っていると事故になりにくいし、責められる方も安心してご主人様に奉仕出来るというモノだと私は思ってるわ。何というか、自分のS衝動を満たすだけの一方的な行為は、虐待と同じ事なのだから……」

「はい。……私もそれには同感です」

「それに、相手の限界を見極めた上で相手を快楽の中に堕とした時って、子宮が疼いて軽く絶頂しちゃうのよね。その時クリトリスを弄ったりすると、もう最高に気持ち良かったりするの……ホント、困った義姉よね…私って」

「そんな事無いです。お義姉さんの様な方が相手だったら、私も信頼して思いつきり絶頂の中に堕ちていけますもの」

「そうね。Mの人にそう言って貰えるのが、Sとしては何よりも嬉しいし、何よりのご褒美なのよね」

そう言うセイラの表情は、本当に嬉しそうだ。そうしているとハマーンがこんな事を訪ねた。

「あの……先程の話だと……お義姉さんは……そのアムロにもこういう事やったのですか？」

「ええ、そうよ。彼は貴方と同じく筋金入りのMだもの。彼と肌を合わせて気付かなかった？ ニュータイプ同士だったらセックスの時に共感し会えたと思うのだけど……」

「セックスしている時は、彼の心の中を読まないようにしてましたから……」

「何というか、男性って前立腺があるから、そこを感じるように開発さえしてしまえば、後は割と簡単に絶頂出来るようになるから羨ましいのよね。まあ、それは私達女性も子宮で感じるようにはなれるけど……」

「……」

「これは……私達がホワイトベースに乗っていた頃の話なんだけど、あの頃はまだお互い性欲に際限がなくてね、毎回失神するまでセックスは当然としてアナルや尿道まで使ってかなりハードなプレイをしまくってたわ。許して下さいってお願いしても、S役側が満足するまで決して許さなかったの……若かったなあ……」

「私とシヤアも結構ハードなプレイをしてましたが、どちらかというと縛ったり羞恥プレイが中心で、最後は彼が私の中に出して終わりでしたから……」

「それでいいのよ。こういうプレイは快楽を追求すると際限なくなるから……。そう言えば、お互い太いアナルプラグを入れ合っただけで抜けなくなった事があってね……。何とか抜こうとしたのだけど痛くて抜く勇気が出なくて……そうこうしてたら出撃命令が下って、そのまま戦場へ向かった

事もあったわ……。体は汗やら体液やらでベトベトのままだったし、アムロなんてコックリングをしたままだったかしら……。お互い生きて帰還出来てから何とか外したけど……。あの時は本当に焦ったわ。それ以降ね。戦争中に余り無茶をしなくなったのは……。でもその頃には二人ともかなり体を開発し切ってたから、普通の人から見ればそれでもかなりハードな事をやってたと思うわね」

そんな事を平然と言つてのけるセイラに、ハマーンは自分のアブノーマルのレベルがまだまだ下だと感じた。そうしていると、セイラが彼女に顔を近付けて、目を合わせながら言った。

「貴方の腸の中……。柔らかくつてとっても気持ち良かったわよ。それに貴方が失神したので手を抜いた時に見えた赤い腸壁がとっても綺麗で愛しかったから、ついお尻の穴を広げて舌を入れて愛撫しちゃったわ。許してね。ハマーン」

その言葉に、思わず視線を反らして答えるハマーン。

「私の汚い部分が気持ち良いだけでなく、口まで付けて愛して下さるなんて……。Mとしては本当に嬉しい限りです。それに……」

一瞬話すのを躊躇したハマーンだったが、更にこう言うのだった。

「浣腸をして排泄感の中で腸の中を刺激するのは、言葉に表せない位の快感でした。私の性癖と合っているみたいなので……。何だか癖になってしまいです」

「ふーん。気に入ったんだ。じゃあ、今度はもっと肛門を拡張して両手を入れてみたり、浣腸液を濃くして刺激を強めた上で、更に奥まで入れてみようかしらね。アムロで試した事あるんだけど……。肘位までなら結構簡単に入るものよ」

「えっ……!？」

戸惑うハマーンに、セイラはそつと髪をなでながら笑って答えた。

「嘘よ。嘘。確かに貴方とそういうプレイもしてみたいけど、肛門拡張もやり過ぎると閉まらなくなるしね。貴方も排泄物を垂れ流すのは嫌でしょ？」

「そう…ですね」

「何事も程々が一番良いのよ」

「はい。出来るだけ……気を付けます」

「そうね。もしどうしても自分の性欲を押さえられなくなつて、そういう方向へ進んでしまいそうだったら、すぐ私を呼びなさいな。私だったらどこまでがその人の限界かを把握出来るから、たぶんやり過ぎて後悔する事は無いと思うのよね。他の人ならともかく、ハマーンの頼みだったらどこからでも飛んでくるわ」

「もしそういう精神状態になった場合は……本当にお問い合わせするかも……。お義姉さんに責めて頂けるのでしたら……ハマーンは幸せですから」

「あら？兄とプレイするよりも？かしら？」

「えっ！あの……その……」

その意地悪な質問に、困惑するハマーン。セイラは笑いながら言った。

「ゴメンゴメン。比べられるモノじゃ無いわよね。私も兄とは色々なプレイをしたし、私の性癖を形作つた男でもあるから……複雑な気持ちなのよね。だから少し意地悪な質問してみたくなっただけなの。許

してね」

ハマーンの頬に軽くキスをするセイラ。その後二人は場所をベッドに移して、明け方まで土肥らとも無く責め、どちらとも無く果てを繰り返した。

*

*

*

その後、二人の濃密なプレイはそれから更に一週間続いた。ハマーンが受けたアナルプレイを、ある時はセイラが行ってハマーンにS役を頼んだり、ある時は二人でシックスナインの姿になりながら行ったりと、あくまでも密室内でのプレイではあるが言葉では表現出来ないようなアブノーマルなプレイが連日繰り返された。そして、全ての仕事が終わりと、報酬としてのアブノーマルプレイの期間も終え、セイラが帰る日になった。ハマーンは彼女を見送る為、宇宙港へ一緒に行きしばらく昔の会話をしたりして談笑していた。その姿は、仲の良い姉妹に見えたり、長年付き合っている親友の様にも見えた。そんな中、セイラはこんな事を問いかけた。

「昔の貴方はアクシズの民の生活を守る為に必死だったけど、今も虐げられる事が多い元ジオン国民の事を考えて行動している……いくら公式には死亡扱いになっていて、戸籍上は別人になったと言っても、法律はそれを守る者にしか有効では無い事位判るでしょう。確かにサイド6から出なければ比較的安全だからと言って、それも絶対にとはいえないわよ」

心配そうに問いかけるセイラに、ハマーンは毅然とした態度で答えた。

「確かに私が表立って行動する限り、アルテイシア・マイネがハマーン・カーンそのものであると知る者が出てくるかも知れませんが、元ジオン国民の中にも、私の身柄を地球連邦に引き渡す者が出ないとも限りません。でも、昔も今も、私という人間を頼る人がいる限り、私は自分の幸せよりも皆の幸せを優先してしまうんです。確かに昔はアクシズという組織を率いて行動していた為、連邦側から見れば許しがたい行動をしたとも理解してます。でも、自分の組織を優先させる為、そして全てを最善の方法で行うには、あれしか手が無かったと、今でも思ってます。それに比べれば、食べさせる国民を持たない今の組織でしたら、私が今出来る最善の方法で皆の心……旧ジオン公国国民の心を救ってあげたいと……気付いたら自然と行動を起こしていました。ですから、今後私の身に何があっても決して後悔だけはないつもりです。ただ、もしそういう時が来た場合……息子……ハリーの事だけが心配なのですが……」

ハマーンの言葉に、セイラはポンと肩を叩いて答えた。

「そんな自体にならない事を祈るけど、その時は私が命をかけて守ってみせるわね。安心しなさい」

「……」

ハマーンは、その言葉にただ無言で頭を下げて答えた。やがて出発の時間がやってきて、荷物をもつてゲートを通る前にセイラが言った。

「ハマーン。私……本当を言うかね。以前貴方と会って帰った時、もう会うまいと思ってたの……。何というかお互いそれぞれの人生があるし、私はともかく貴方は色々……ね」

「……」

「でもね。貴方から『助けて』って連絡を受けた時、私……本当に嬉しかったのよ。私の大切な義妹が

私を頼って来てくれた……ってね。それに実際に現場へ来てみて、貴方の仕事の内容なり人となりを見て、貴方の物事に対する真剣さが本当に良く伝わってきたし、あの場所で働いている人々、更にあの場所に来る人々皆が貴方を信用してるってのも良く判ったから……私も出来る限りのお手伝いをさせて頂いたし、今なら来て良かったって心の底から思えるわ。これ、本当の事よ」

「お義姉さん……」

「私は良い義妹を持ったってみんなに自慢したい位よ。だから、もう自分の心に嘘は付けないから……会いたくなったら遊びに来るので……その時はよろしくね。ハマーン」

「は……はい。その時は喜んでお相手させていただきます。セイラお義姉さんも……お元気で……」

「じゃあ、またね。ハマーン……いや、アルテイシア・マイネさん」

そう言うと、セイラは笑顔で手を振りながらゲートへと向かった。

その後、二人は数ヶ月に一度は会う仲になった。また二人とも、元の性癖は違うのだがSもMも理解している間柄なので、ソフトなプレイから、ハード過ぎるプレイまで、SとMの役を交代しながらどちらも精根尽き果てるまでプレイするのだが、それはまた別な機会にでも紹介出来れば幸いである。

ネオ・ジオンの指導者としてのハマーン・カーンは公式的には死んだのだが、サイド6での母としての、また旧ジオン公国国民の、そしてセイラ・マスの良き理解者としてのハマーン・カーン（現在は戸籍を買ってアルテイシア・マイネとして暮らしている。その辺りは過去の小説を参照の事）は未だ健在である。違うのは、その持てる力をより良い方向へ使っているという事だけだった。

宇宙世紀の歴史には刻まらない、民間人のプライベートなエピソードである。

【完】